

大東文化歴史資料館だより

第7号 2009. 11. 30

歴史はおもしろい

大東文化学園 理事長 市川 護



歴史を紐解くと、小説より奇なる事実が散在している。昭和47年（1972年）田中内閣による日中国交正常化が実現し、調印式の模様が華々しくテレビで報道された。しかし、その裏で中華民国（台湾）との国交が断絶したことはあまり報道されなかったし、今でもそれを伝える人は少ない。

当時、台湾に君臨する国民党の蒋介石総統は、日本に対し「我々は大陸各地を占拠していた日本の過去について、その賠償を求めなかった。仇に報いるに恩を以って接したのに、日本政府は我々の恩に仇を以って報いた」と嘆いたという。

日中間では次の重要課題である航空交渉が開始された。しかし、交渉が進捗する中で、最も大きな懸案事項のひとつとして取り沙汰されたのが、引続き運航が継続していた青天白日旗を尾翼に掲げる中華民国（台湾）国営中華航空（C I）機の向日本便と、中国本土乗入れがほぼ確定した日本航空（J L）機の向台湾便の取扱いであった。そして中国側が特に拘ったのが、中国共産党と対峙し、台湾で政権の座にあった国民党の党旗をもとに作られ、台湾の国旗とされていた青天白日旗を尾翼にデザインした中華航空機の日本乗入れであった。

昭和49年（1974年）春、当時の大平正芳外相は「青天白日旗を中華民国（台湾）の国旗とは認識しない」との談話を発表した。この談話は中国政府から一定の評価は得たものの、台湾の蒋介石総統の激憤に触れることとなった。蒋介石は中華航空機の向日本便の運航を直ちに打ち切ると共に、日本国籍のいかなる航空機も、台湾領空内では国籍不明機と見做して、直ちに撃墜するとの声明を出した。かくして日台間の航空路は断絶した。

爾来、志ある日台双方の親日、親台国会議員により水面下で事態打開策が話し合われたが、問題の本質が、台湾を国家として認めるか否かという台湾の尊厳に係わるものであっただけに、容易に解決することはなかった。日本の国会議員も、その多くが国会の場で日台間の早期航空路線復活を訴え続けた。

年が明けて昭和50年（1975年）、時の外務大臣宮沢喜一は日台航空路再開を主張する国会議員の質問に対し、「青天白日旗を台湾の国旗として認める国々があることは了解している」と答えた。蒋介石の後継者である蔣経国は、この発言を日本からの善意のメッセージとして捉え、直ちに日台路線再開に向けた交渉を開始するよう、配下に指示を出した。双方共このきっかけを待ち望んでいた訳であるから諸検討も早く進み、合意は容易であった。

かくして、昭和50年（1975年）8月、中華航空機が日本に飛来し、9月に中国大陸運航と無縁の日本アジア航空が日本航空に代って台湾への運航を開始した。

しかし、中華航空は、中国機が使用することになった伊丹空港と成田空港を利用することができず、福岡空港への路線変更と羽田空港利用を余儀なくされた。その後尾翼から青天白日旗も消えた。

昨年（2008年）3月、台湾国民党の馬英九氏が総統選に勝利し、台湾独立を掲げる民進党に代わって将来中国との統合を視野に入れる国民党が与党になってからは、中国大陸便を持つ日本航空が台湾に飛び中華航空機が成田、関西両空港に飛ぶことも可能となった。中国政府が従来の強硬姿勢を柔げる方向に舵を切ったのである。台湾と大陸間の直行定期便が飛ぶ日も近い。

東アジアの歴史の渦の中で、三つの政府、国民が翻弄されてきた。今後、中台が接近して日本が離れていくのか、日中が接近して台湾が離れていくのか、日台が接近して中国が離れていくのか、はたまた日・中・台相互間に波風が立たず、平穏な関係を維持する日々が続くのであろうか。

大東アーカイブスは学園創立百周年に向け、大東文化学園百年史編纂の準備に入っていると聞く。大東文化の歴史の中にも「事実は小説より奇なり」とも言うべき物語、教訓が詰まっているに違いない。改めて大東文化学園史に溢れる様々の教訓から、学園の永遠の繁栄への道すじの一端でも見出すことができれば幸いであり、それを強く望んでいる。

大東アーカイブス 第8回 企画展

大東文化学院創設をめぐる人々 (IV)

～大東文化学院初代副会頭 小川平吉～

展示期間：平成21年10月5日(月)～平成22年3月31日(水)

(開室時間 毎週月～金曜日 9:00～17:00)

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)



——現在、展示室では、小川平吉展を開催しています。大東文化協会初代副会頭として大東文化学院創設に尽力した平吉の書幅・論稿・書簡などゆかりの品々を、学院創設期の資料とともに紹介しています。

小川 平吉 [1869 (明治2) 年12月1日～1942 (昭和17) 年2月5日]

大東文化協会初代副会頭、第4代会頭。明治から昭和前期にかけて活躍した政党政治家。司法大臣や鉄道大臣を歴任。号は射山。長野県諏訪郡富士見村御射山神戸(みさやまごうど)に、呉服商の父小川金蔵、母あい子の八人兄弟の三男として生まれた。号の「射山」は故郷の地名にちなんだものである。13歳(数え年で14歳)で上京し、明治法律学校(現在の明治大学)や東京大学古典講習科に一旦入学するも長兄たちから漢学者への道を反対され中退した。この時期の平吉の愛読書は四書や春秋等の経書であった。ごく短期間であるが小永井小舟の漢学塾「濠西精舎」にも学び、漢学の素養を身に付けた。家人らの反対により諦めたものの、平吉の生涯を通じて高い儒学的教養が貫かれていることは明らかである。

父兄から官吏となることを期待された平吉は、当時まだ14歳であったにも関わらず、入学年齢16歳以上と定められていた司法省正則法律学校(直後に「東京大学予備門」へ合併され、後に「第一高等中学校」と改称される)の入学試験を受け、パスする。1889(明治22)年に帝国大学法科大学仏法科(現在の東大法学部)へ進学、1892(明治25)年に卒業後、代言人(翌年より弁護士法が施行され弁護士)となった。当時の日本社会では代言人の数そのものが少なく、また、ほとんどの学士が官吏となるのが常であった中で法学士が代言人となるのはさらに稀なことであり、平吉が代言人となった際の代言披露の様子が毎日新聞に記事として掲載されたほどであった。1897(明治30)年に日本弁護士協会を組織。積極的に司法の革新を目指し、1918(大正7)年には東京弁護士会会長に就任した。

1900(明治33)年、立憲政友会の成立とともに入党し、1903(明治36)年に衆議院議員に初当選を果たしたものの、政友会革新運動を起し脱党することとなる。1910(明治43)年、伊藤博文の死去後に復党。1915(大正4)年、政友会幹事長となった。1920(大正9)年、原敬内閣のもとで国勢院総裁となるも、1922年6月の高橋内閣の総辞職にともない国勢院総裁を辞任。1925(大正14)年の第1次加藤高明内閣(護憲三派内閣)で司法大臣、1927(昭和2)年の田中義一内閣で鉄道大臣をつとめた。

大正後期から昭和初期にかけて大東文化協会及び大東文化学院の創設・発展に関わったが、1929(昭和4)年、鉄道大臣在任中の5つの私鉄の買収にからむ収賄容疑(「五私鉄疑獄事件」)に連座して収監され、一時は無罪判決を受けるも1936(昭和11)年になって有罪判決を受け、政治生命が絶たれた。これにともない大東文化協会会頭も辞任した。

◆ 小川平吉と大東文化協会の創設

小川平吉は、大東文化協会の創設及び発展に最も深くかつ積極的にかかわったメンバーの一人である。もともと国粋主義者として知られ、大陸問題に強い関心を持って大陸政策を進め、江湖倶楽部を組織し、また東亜同文会の幹事(後に幹事長)をつとめた。日本人の「思想問題」にも関心をひろげ、その中で大東文化学院創設に携わった。1923(大正12)年2月に大東文化協会を創設すると自身は副会頭に就任し、初代会頭にはやはり国粋主義者として知られた伯爵大木遠吉を迎えた。

平吉の残した『統対支回顧録』には、「皇道に醇化したる儒教振興の目的を以て同十二年の初め同志と謀り政府の補助を仰いで、大東文化協会並に大東文化学院を創立し、その副会頭となり後更に会頭となった」と記されている。

大東文化学院創設直後、学院の教育方針や運営をめぐる方向性を見出せずにいた時期、混乱の中で首脳陣の人事変更が何度も繰り返される中、協会副会頭の平吉のもとには、広く教授陣や学生たちから陳情書が届けられ、学院の在り様について模索が続けられた。そういった問題打開に尽力した平吉が大東文化協会会頭に就任したのは、1928(昭和3)年12月のことであった。折しも大東文化学院紛擾による混乱がおさまりを見せた直後のことであったが、「五私鉄疑獄事件」に連座収監されたことにともない、1930(昭和5)年3月、会頭を辞任することとなるのである。

◆ 小川平吉関係資料の所在

小川平吉の生家や別荘「歸去来荘」に残されていた文書資料のほとんどは、整理された後に国立国会図書館憲政資料室へ移管され、現在は「小川平吉関係文書」として閲覧公開されている。その内容は多彩であり、特に政友会関係資料が充実している。また、書簡のうちには大東文化学院創設前後に取り交わされたものも含まれている。書類中には中国・ソ連といった大陸問題(大陸積極策)に関する対外政策についての草稿や原稿の類が多い。

なお、現在に至るまで小川平吉についての本格的伝記研究は編まれておらず、『小川平吉関係文書(上、下)』(みすず書房、1973年)が最も信頼のおける資料解説集として刊行されているのみである。



小川平吉生家跡石碑

第3回百年史研究会・概要

2009(平成21)年7月23日、折田悦郎氏(九州大学大学文書館教授、同大学史料室長)を講師として、第3回百年史編纂事前研究会が行われた。

折田氏は、『九州大学75年史』編纂時から九州大学史に携わってこれ、その後、編纂室から改組されて1992年に設置された「九州大学大学史料室」時代から、2005年より発展的に設置された現在の「九州大学大学文書館」まで、20年余りにわたってその中心となって活動されている。2009年度からは文書館内に百年史編纂室が設置され、現在は副編集長として年史編纂に取り組んでいる。

講演は、(I)大学アーカイブスが設置されてきた経緯、(II)年史編纂後の九州大学大学史料室の設置、(III)新たに改組設置された九州大学大学文書館の目的と機能および百年史編纂事業について、という大きく3つの柱に沿って、次のような内容で進められた。

近年、国立大学を皮切りにして私立を含めた大学の多くがアーカイブスを設置する風潮となってきている。その大学アーカイブスの基本的機能は、①大学に関わる資料収集整理、②調査研究、③教育活動であるが、そのほかにも社会的アカウンタビリティという重要な使命も課せられている。

大学アーカイブスにおける活動の重要なポイントとしては、兼務となる教職員に如何に協力してもらうか、そのポジションや役割を明確に打ち出すことであると考えられる。九州大学大学文書館となってから4年経つが、現在までに法人文書の移管もさることながら個人文書の移管も多い。これらについて職員の協力のもと文書移管を円滑に進め、学内の教員とともに共同研究を行っていくことは主要活動の一つである。また、九州大学ではもともとオーラルヒストリーに重きを置いてきたことも特徴の一つと数えられる。

九州大学文書館ではこれまでに、全学教育の一環として九州大学史の授業を開講するため、「九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(C)」を受けた共同研究「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」を行い、その成果をもとに財団法人九州大学後援会助成事業費を受けて九州大学の歴史に関する教科書『大学とはなにかー九州大学に学ぶ人々へ』(2002年)を編集出版するなどを通して、全学的な広がりを持つ活動を推進してきた。1997年度より開始した「九州大学の歴史」に関する自校史教育の授業は、国立大学では最初の画期的試みであった。そのほか、新キャンパスの建設・移転の様子を映像や画像で記録する「九州大学『記憶の保存』プロジェクト」を推進し、また「九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現況調査について」「九州大学『伊都キャンパス』記録プロジェクト」等を立ち上げるなど、数々の研究を進めている。

九州大学では今年度(2009年度)より、新たに百年史編纂室を設置した。基本的に文書館と編纂室とは別の組織であるべきというのが個人的見解である。しかし、全学組織でやるべきであるというのと、文書館発展のためにアーカイブス中心でやればよいというのと、双方の学内意見があり、結果的に文書館内に編纂室が置かれることとなった。百年史編纂にあたっては、教員待遇の室員を2名、テクニカルスタッフ2名という、専門研究者を新たに置くことは絶対に譲れない条件として提示した。百年史の刊行は8年後を予定している。

今後の文書館としての課題も多くある。どこもそうであるが、収蔵スペースの問題である。面積がとにかく足りない。また、学内での文書移管がまだ義務となっていないこともある。また、個人情報受け入れ・活用における個人情報の取り扱いも今後の課題の一つである。

大学アーカイブスは、きちんとした組織になれば、大学として非常に「使いがいのある」組織である。大学理念を常に確認していくことにも繋がっていく。大東大における年史編纂に向けても、他の私大も参考にしつつ、まず体制整備を進めていくべきだろうと思う。

(想起記録：大東文化歴史資料館 浅沼薫奈)

・・・第3回百年史編纂事前研究会に参加して・・・

— 内部制作型の課題 —

第3回目となる研究会は、九州大学大学文書館教授の折田悦郎先生を講師にお迎えし、大学文書館の設立経緯と百年史編集体制の現況についてお話いただきました。

九州大学では、今年(2009年)の1月に、百年史編集室を大学文書館内に設置し、8年の編集期間を予定して2017年完成を目途に百年史編集事業に着手しているところだそうです。そういう意味では、百年史編纂準備室の開設を目指している大東文化歴史資料館にとって、極めて近い事例研究の対象となりうるものでありました。

近年、大学史編纂の態様としては、内部制作型と外部委託制作型の2つの流れがあります。九州大学においても、当初は、出版社などに外部委託したらどうかという声があがっていたそうです。ところが、折田先生は、これに反対し、学内・学外に向けて大学の理念を明確にすることが大切であると訴え、内部制作型に決定したそうです。その際、内部制作型の重要なカギは、人的スタッフをいかに確保するかであり、一番力を注いだ局面であったようです。

現在、九州大学大学文書館では、専任教員3名(教授1、准教授1、助教1)、専任教員2名(テクニカルスタッフ=学術調査員2)、専任事務職員1名、事務補佐員2名を擁して百年史編集事業に取り組んでおります。本歴史資料館の直面する課題も、やはり、人的スタッフの確保にかかっているのではないのでしょうか。

(大東文化歴史資料館運営委員・東洋研究所教授 兵頭 徹)



*** 所蔵資料紹介 ***

～大木遠吉顯彰碑拓本～

大東文化協会初代会頭・大木遠吉の出身地、佐賀県佐賀市水ヶ江には、縦4.8m横1.8mの巨大な石碑が建立されています。遠吉が1926（大正15）年に逝去した際に建立されたもので、大東文化大学同窓生等の協力によりその顯彰碑の採拓がされたのは、昭和60年5月3日のことでした。

台石からの高さが8m超となる碑石の採拓は非常に難しく、作業は難航を極めました。8時間に及ぶ苦心の末に採拓された拓本は、父兄会事務局から学園へ寄贈され、以後は大学図書館が所蔵していました。そして、2006年の歴史資料館（大東アーカイブス）の開設と同時に当館へ移管されました。

巨大な資料のため公開する機会は少ないですが、貴重な資料として保管しています。

（「大東文化新聞」第367号・昭和60年6月15日を参照しました）



<資料寄贈ご協力のお願い>

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関紙・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら歴史資料館までご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。

【大東アーカイブス活動記録】（2009年4月～2009年9月）

- | | |
|--|---|
| 4. 3 企画展入替作業・チラシ送付 | 6. 27 自校史教育「現代の大学」⑩ |
| 4. 6 第7回企画展「大東文化学院初代総長・平沼騏一郎」公開 | 7. 2 アーカイブス研究会参加（於：早稲田大学） |
| 4. 11 自校史教育「現代の大学」①（オリエンテーション） | 7. 4 自校史教育「現代の大学」⑪ |
| 4. 23 全国大学史資料協議会東日本部会幹事校会参加
（於：武蔵野美術大学） | 7. 9 全国大学史資料協議会東日本部会幹事校会・研究会参加
（於：武蔵野美術大学） |
| 4. 25 自校史教育「現代の大学」② | 7. 11 自校史教育「現代の大学」⑫ |
| 5. 9 自校史教育「現代の大学」③ | 7. 13 歴史資料館合同部会会議 |
| 5. 16 自校史教育「現代の大学」④ | 7. 18 自校史教育「現代の大学」⑬ |
| 5. 23 自校史教育「現代の大学」⑤ | 7. 23 歴史資料館運営委員会
歴史資料館第3回研究会 |
| 5. 30 自校史教育「現代の大学」⑥ | |
| 5. 31 ニュースレター『大東文化歴史資料館だより』vol. 6 発行 | 9. 3 地域科学研究会高等教育研究センター主催
アーカイブス研究会参加（於：教育会館） |
| 6. 6 自校史教育「現代の大学」⑦ | 9. 17 全国大学史資料協議会東日本部会幹事校会参加
（於：國學院大学） |
| 6. 13 自校史教育「現代の大学」⑧ | |
| 6. 19 日本大学より展示施設・収蔵庫見学対応 | |
| 6. 20 自校史教育「現代の大学」⑨ | |